

毛沢東時代の読書規範

－政治文化の連続性に着目して－

比護 遥

1. はじめに

本稿は、毛沢東が実権を握っていた時期(1949-1976)の中華人民共和国において、いかなる読書規範が流通していたかを明らかにするものである。

改革開放期(1978-)以後の言説では、読書が制約されていた文化大革命期とそれ以降の読書が活発に行われるようになった時期の対比が、しばしば強調されることになる。例えば、1980年代の知識人の必読誌として「文化熱」を牽引した『読書』(1979-)の創刊号は、「ほとんど全ての本が、一瞬にして非合法のものとなり、本屋から失踪した」という文革期の書物の受難を説くことから始まる¹。知的メディアとしての本の復権が、「十年の動乱」からの時代の転換に重ね合わされたのである。

同じ認識は、1980年代末の「読書無用論」についての論争からも読み取れる。市場経済の全面化による功利主義的な風潮の下で読書の軽視が懸念されるようになったとき、多くの場合、文革期の状況が引き合いに出された。例えば、読書観を調査した当時の雑誌記事には、次のような言及がある。

読書無用論は早くも「文革」十年動乱の中で出現したことがあるが、それは当時の「知識が多ければ多いほど反動的である」という影響を受けて生じたものであって、ある種の反文化的思潮であった。それに対して現在新たに出現している「読書無用論」は昨今の商品経済の確立により、人々の価値観が変わったことで生じたものだ²。

しかし、これらの言説において見落とされがちであるのは、後に確認するように、毛沢東時代、とりわけ文化大革命期などのいわゆる政治的に「左」の影響が強まったとされる時期に、むしろ読書は積極的に奨励されていたということである。したがって、「読書を肯定するか否定するか」ではなく、「いかに読むか」という規範(code)の内実を同時代の言説に立ち戻って把握する必要がある。本稿では、この分析のために、党の公式的な立場を反映しておりかつ通時的な分析が可能なコーパスとして、主に中国共産党の機関紙『人民日報』を検討する。必要に応じて他の史資料も組み合わせる。

本稿の構成は以下の通りである。続く2では、先行研究を参照しつつ、分析の視座を定める。とりわけ、読書規範を政治文化として捉え、その連続性を重視する観点を強調する。3で『人

民日報』データベースをもとに言説の全体的傾向を確認したうえで、4 と 5 で時系列に沿った具体的な分析を行う。6 では、本稿の議論をまとめて結論とする。

2. 先行研究と視点

読書という実践(*pratique / practice*)を歴史学の対象とすることは欧米の学界で主に先行しており、「新しい文化史」の流れを受けたロジェ・シャルチエ、ロバート・ダーントンらが牽引してきた領域であるが、近年このような関心は中国にも輸入され、北京大学の王余光らを中心に読書史（中国語で閲読史）の研究が進展している。しかし、王余光主編の『中国閲読通史』は、「中華人民共和国巻」を出版予定であったことが窺えるにもかかわらず、現在に至るまで出版されていない³。その理由は不明だが、あるいは政治的要因に関わるかもしれない。

ただし、文革期の読書については、香港や欧米で近年優れた研究が出ている。その多くは、内部発行の翻訳書などの地下読書の実態を、回顧録やオーラル・ヒストリーにより明らかにするものだ⁴。文革以前からこのような自発的な読書が行われていたとする指摘と合わせて⁵、1980年代以降の思想の源流を示している点で貴重な成果である。本稿の当該箇所においてもその内容について改めて触れることにするが、本稿の主要な問題意識は、公的規範から外れた読書の実態があったということもさることながら、そもそも読書の規範とは何であったかも十分には明らかにされていないということにある⁶。読書規範を重視するのは、シャルチエが指摘するように、同一のテキストであっても一様に読まれるわけではなく、「読み方は、読む行為を支配する期待・関心という決定要因に依存する」からだ⁷。規範を確定することで初めて、その「逸脱」の意味を正しく理解できる。

この点から言えば、「社会主義文学システム(*socialist literary system*)」という観点から社会主義中国における文学生産のメカニズムを論じているペリー・リンクの『文学の効用(*The Uses of Literature*)』は、書物への政治的期待に注目する点で本稿の関心にかかなり近い⁸。ただし、読む側よりも書く側に重点が置かれていることに加え、1970年代以降が分析の中心となっている点で異なる。

本稿が分析対象とする時期は、前述したように主には毛沢東時代であるが、このとき、1949年や1966年、1978年といった政治的節目に決定的な断絶があるとするのではなく、むしろ「継続革命(*a continuous revolution*)」⁹として中国現代史を捉える視点を採る。この点において、空間や儀礼、歴史、ビジュアル・イメージ、記念などの側面から、伝統と近代性を組み合わせつつ形成された政治文化(*political culture*)を描写する洪長泰(*Chang-Tai Hung*)の『マオの新世界(*Mao's New World*)』と立場を共有する。洪は以下のように「政治文化」を定義しており、本稿はこれを踏襲したうえで、読書がいかに政治文化として編成されたのかを問うものとなる。

この術語はここで、公式の政治や制度ではなく、ハイポリティクスが創造した集団的なビジョン、共有の態度、公的な期待を意味するものである。これらの共通見解は、日常生活を形作る上での政治の優位性を強調するものであり、象徴や儀式、ビジュアル・イメージを通じて表現される。(中略)しかしこれらの共通価値は支配エリートが始めたものとは

いえ、決して一方的に上から課されるものではなく、下からの反応や時には抵抗に応じて、指導者は常に戦略を調整しなければならない¹⁰。

政治文化としての読書規範を通時的に考察するにあたり、とりわけ三つの連続性に着目する。第一に、伝統的な読書規範との連続性である。そもそも「読書」という言葉自体が、伝統的には古典を読むという「読書人」としての特権的行為を指すものであった¹¹。古典に現れる儒教的伝統をイデオロギーとしては基本的に否定しようとした共産党体制においても¹²、「読む」という形式を継承する以上、伝統的な読書規範は陰に陽に参照されることになる。

第二に、中華民国期、とりわけ 1930 年代からの連続性である。大衆読者層の勃興を背景として 1930 年代に同時多発的に出現した読書雑誌（書評や読書指導を中心とする雑誌）の言説分析をもとに、「読書のための読書」を肯定する立場（以後、便宜的に「内在的読書観」と呼ぶ）と、目前の国家的危機を解決することに直接的に役立つ本のみを効率的に読むべきだとする立場（同じく「道具的読書観」）の対立が見られることを別稿ですでに明らかにした¹³。政治宣伝と読書を結びつける道具的読書観が当時ある程度広く共有されたことは、戦争と革命運動の課題に直面し続けていた中国の事情を反映するものであるが、重要なことは、これを必ずしも上意下達的な強制性のみから捉えるべきではなく、むしろ読者の政治的自発性に依拠するものであったということである。そうでなければ、政権の立場とは異なる左派の読書雑誌が発行され、さらにそれを購読する読者がいたことを説明できないだろう¹⁴。

しかし、人民共和国成立後は、このような自発性を体制に取り込む形で読書規範が形作られていくことになる。このことは、印刷技術の発展を背景として生まれた文書中心政党(text-centered party)としての中国共産党が¹⁵、世論の一元的統制を行うソビエト連邦の宣伝国家(propaganda state)をモデルとして国家建設を行った文脈を踏まえれば¹⁶、容易に理解できる。ソ連史研究者のピーター・ケネツは、イデオロギーを根幹とする国家において、活字媒体が決定的に重要であることを、次のように説明している。

リテラシーは有用であるが、大衆に訴求するのは他の手段であるというのが近代の経験が教えるところである。しかしロシアの人々に社会主義のメッセージを理解させるためには、読み書きのできる農民層が不可欠であるとレーニンとその同志たちは固く信じていた。この信念を最も明確に示しているのはレーニンの有名な言葉である。「読み書きのできない人は政治の外側にいる。まずは彼にアルファベットを教えなければならない。それなしでは噂やおとぎ話、偏見があるのみで、政治はない。」¹⁷

第三に注目したい連続性は、改革開放前後のものである。前述したように、1980 年代には読書の復権という認識が広まることになるが、そのときしばしば意識されたのは 1930 年代の状況である。例えば『読書』の創刊にあたっては、「形式と内容の両面で、三十年代の我が国の進歩的な出版事業の優れた伝統を継承してさらに高めている」¹⁸という評論がなされた。しかし、1980 年代の読書規範は単純な 1930 年代への回帰とは言えない。例えば共産党地下黨員を中心とした『読書生活』(1934-1936)が内在的読書観を強く批判して道具的読書観を打ち出したのに

対して、その後継誌にあたる『読書』は、現実政治からは距離を置いて制約なき読書を呼び掛ける点において、内在的読書観に接近するものであった¹⁹⁾。とはいえ、読書を奨励するという観点を共有する限りにおいて、道具的読書観も完全には排除されなかった。これらのねじれた関係性については、議論の射程を検討する6で詳しく考察することにしたい。

3. 全体的傾向：『人民日報』データベースから

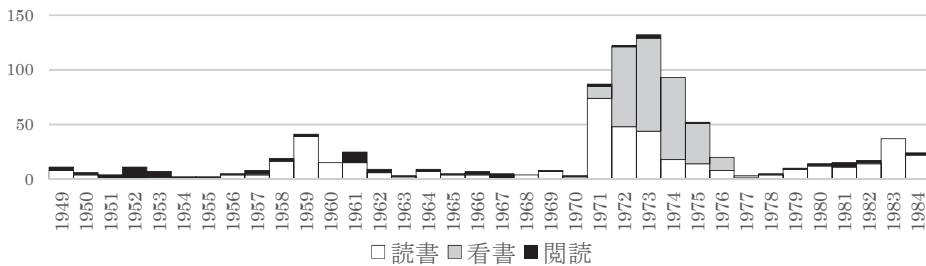


図1 『人民日報』で見出しに「読書」「看書」「閲読」を含む記事数

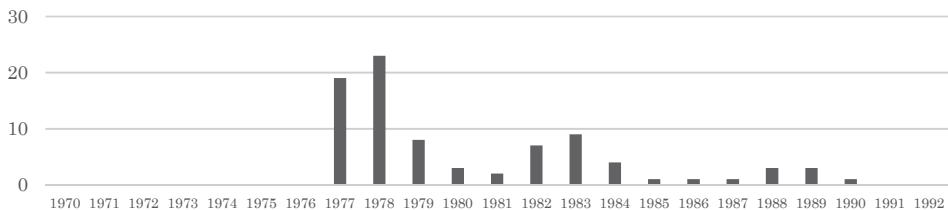


図2 『人民日報』で「知識が多ければ多いほど反動的である（知識越多越反动）」を本文中に含む記事数

まずは『人民日報』における読書についての言説の分量の全体的傾向を確認したい。図1は、データベース「人民日報図文数拠庫(1946-2020)」(<http://data.people.com.cn/rmr/b/>)をもとに、見出しに「読書」及びその類語を含む記事数の推移を示したものである。ここで留意する必要があるのは、中国語の「読書」は日本語よりも意味が広く、単に「本を読む」だけではなく、「教育を受ける」ことや「学校に通う」ことも含意するものであるということである。ただし両義的であるがために日本語の用法に合わせて厳密に区別することは困難であり、本稿ではむしろ中国の言説空間においてこれらの知識受容の行為が「読書」という同じ語で把握され、連続的な文脈で議論されていたことを重視する。また、「看書」は「読書」とほぼ同義だが、やや口語的であり、1970年代初頭に増加した理由は全体的な口語化の傾向を反映したものだと考えられる。5で検討する「真剣に読書せよ（認真読書）」のスローガンを「認真看書」とも記す事例が多くを占めていることからわかるように、言説の中身には大きな差はない。また、単に「読む」を意味する「閲読」の記事数は少なく、全体の傾向に影響を与えるものではない。

この図1から読み取れるのは、1950年代末の大躍進政策の時期や、1970年代初頭の文革後期に関連記事数が急増しているということである。文革中の1969年以降は「読書無用」という語が見出しに含まれることもあったが、それらについても後述するように「読書無用」が「誤っ

た考え方」であるとして反論を加えるものだ。そもそも、文革を批判する際によく使われる「知識が多ければ多いほど反動的である（知識越多越反動）」というスローガンそのものが、出典が不明確であり²⁰、図2からわかるように文革の終了後に初めて定型化されたものだ。少なくとも公的な言説においては読書や知識それ自体が全否定されていたわけではなく、いかなる読書が奨励されていたかこそを見るべきことが改めて確認できるだろう。

4. 文化大革命期以前(1949-1966)

中華人民共和国の建国の宣言から2か月遡る1949年8月8日に掲載された「読書と仕事」と題する記事は、それ以降の読書についての記事で繰り返されることになる論理がよくまとまっている²¹。そこで強調されるのは、革命実践と結びつく読書のみが良い読書であるとするものだ。「我々の読書は、革命の知識を学習して、自己武装し、それによりさらに革命工作をうまくやり、人民のために忠実に奉仕するため」であり、「門を閉じて自分で読む」方法を克服して、常に同志と意見交換をしなければならない」とする。しかし、このような実践の強調は読書の否定と紙一重であり、それゆえ「本はやはり必ず読まねばならないものであり、しかもしっかりと読まねばならない」と念押しする必要があるが出てくる。

一部の青年はあまり読書を重視していない。本から得た知識はみな実際から離れており、たくさん労働に参加して、実践に従事することで、本物の知識を得ることができると考えている。(中略)しかし、知識の学習は労働への参加に限られるものではない。同時に本の知識からも学ばねばならない。

他方で否定されるべき読書は、「実際と結びつかず、革命工作の実践行程から離れた読書」であり、「万般皆下品にしてただ読書のみ高し」というような科举時代の「人の上の人」の思想の変相である。「万般皆下品にしてただ読書のみ高し」とは、北宋の汪洙の作として伝えられる「神童詩」からの引用であり、このような立身出世のための読書を促す言説が封建的であるとして、以後一貫して否定的な文脈で参照されることになる。

ここで改めて確認できるのは1930年代の道具的読書観の継承だが²²、当時と状況が異なるのは、読むべき本とそうでない本の区別を実効的な政策として履行する権力基盤が確立したことにある。例えば民衆の読書については、「封建・猥褻・反動の要素を含む」5万5100冊余りの書籍・雑誌を廃棄したうえで、5806冊の新たな書籍・雑誌を購入した保定人民教育館の事例が紹介されている²³。他方で学生や知識人、国民党政権からの留用人員等の「新幹部」に対しても、「マルクス主義を何も知らず、過去の長期にわたる国民党の暗黒統治のもとで、反動派の詐欺的な宣伝の影響や旧社会の思想の影響を受けてきた」として、ある地方では毛主席の指定した12冊を3年で学習する計画が立てられた²⁴。

民国期との対比においてももう一つ興味深いのは、国民党政権下での共産党の地下党員の読書行為が模範として挙げられていることである。

白区〔引用者注：国民党統治地域〕で地下工作をしていた同志は、投獄やさらには生命を犠牲にする危険を冒しながら、手を尽くして「禁書」を探し出して読んでいた。我々の今日の読書は、第一に投獄される危険はなく、第二に殺される危険もないのであって、今と昔を比べた時に、なおどのような困難があると言えるか？²⁵

それでは、共産党政権において、そのイデオロギーに反する本を読む行為はどうとらえられるべきか。実のところこの問題には、『人民日報』の誌面においても、異なる立場が表明されている。当然それらを肯定的に読むことは論外であるとして、反面教師的な読み方を認める意見は次のようなものだ。

主にはマルクス・レーニン主義に関わる本を読む以外に、資産階級の視点を含んだ本を読んでいい。(中略) たとえ毒草であっても、「肥料」とすることはできる。マルクスが『資本論』を欠いたとき、博引旁証して、資産階級の学者の関連する著述もあまねく読んでいたではないか？²⁶

しかし多数を占めるのは、そもそもそのような本を読むべきではないとする以下のような言説である。

当然、どのような本にも一定の価値があり、直接そこから教育を受けられる本もあるし、資料として自らの知識を豊富にできる本もあるし、反面教師にできる本もある。(中略) しかし、どのような本からも有益なものを得て、有用なところを探すためには、必ず正確な立場、視点、方法と鋭敏な分析能力がなければならず、どのような人でもできることではない。一般読者にとっては、もしよくない本を読めば、時間を浪費するだけでなく、毒にあたる可能性もある²⁷。

ここで、「よくない本」を読んでも「毒」にあたらないようにするためには、「正確な立場、視点、方法と鋭敏な分析能力」が必要とされているが、これこそが党幹部らのみに閲覧を許す内部発行という仕組みを可能にする条件であろう。むしろ、そうした本が必ずしも想定された人に想定されたとおりに読まれるわけではなく、しばしば近親者等を通じて青年たちへの「誤配」が起こっていたことは、先行研究が指摘する通りである²⁸。

さて、前節では大躍進政策の時期に読書に関する記事数が増加したことを指摘したが、それは思想統制の強化のための読書が必要とされたからである²⁹。この時期の政治的なステートメントとして重要なのは 1961 年の共産党成立 40 周年大会における劉少奇の講話で、「全党的に新しい学習運動を展開するのが、現在最も重要なことである」として、「学習のための学習」ではなく、自己の思想を改造して、自己の工作を改善するために学習することが呼びかけられた³⁰。国家主席を務めていた劉少奇については、一転して失脚する文革期との対比もかねて検討の価値があるだろう。劉少奇の読書観については、当時も政治的学習の教材となっていた『共産党員の修養を論ず』(1939 年)が詳しい。その内容は当然、読書を革命的実践と結びつける

ことを要求するものだが、孔子などの古典からの引用が少なくない点が特徴的である³¹。1961年の劉少奇講話を伝える『人民日報』の記事の中でも、「孔子は「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し」と言った。これはすなわち、学習のときは読書と思考を密接に結び付けなければならないということだ」³²と、孔子の言葉を引用している。「万般皆下品にしてただ読書のみ高し」を否定しつつも、読書を肯定する伝統的道德はむしろ政治的に援用されたのである³³。

5. 文化大革命期(1966-1976)

1950年代に発行された書評誌『読書月報』(1955-1960)を扱った先行研究が、「長期にわたる「階級闘争」と「文化大革命」の勃発は、多くの読書人口の流出をもたらし、『読書月報』の生存の土壌はもはやなくなった」³⁴と指摘するように、文革期は読書が最も制約された時期であると捉えられがちであるが、それ以前の読書規範に根本的な変更が加えられたわけではない³⁵。例えば開始年である1966年は関連記事数こそ少ないが、ある記事は「革命コースを歩むには読書をしなければならない、しかし我々が読まねばならないのは毛主席の本である」という象徴的な見出しを掲げている³⁶。読むべきとされるのが毛沢東の本のみであるというのは非常に極端であり、文革期の典型的なイメージに合致する紅衛兵による図書館や蔵書家に対する破壊や略奪が行われた時期は、この最初期に限定される³⁷。しかしここでは、それでもなお読書それ自体を奨励したうえで、読むべき本とそうでない本を区別するという道具的読書観のロジックが不変であることに注目したい。

1968年から1969年にかけて「読書」を見出しに含む記事が一定数掲載されるが、それは劉少奇が「読書做官(読書をして役人になる)」論を展開しているとの批判キャンペーンが張られたからだ。

劉少奇は一貫して、「万般は皆下品にして、ただ読書のみ高し」「学びて優なれば則ち仕う」といった搾取的な階級思想を言いふらし、青年たちは個人的に読書して、名を成し家を成し、偉い人になるべきだと必死に鼓吹している³⁸。

このうえで、「読書做官」論を克服して毛沢東思想を習得した事例が模範として多く紹介されることになる³⁹。前節で見たように、劉少奇の読書論では確かに孔子などの古典が多く参照されているとはいえ、革命的実践と結びつけることが一貫して主張されており、個人的な立身出世を肯定するものではなかった。その意味で、上記の批判は実態があるものというよりは、権力闘争のためにする糾弾に他ならないというべきだろう。政治的情勢の変化から、道具的読書観の枠内で読むべき本とそうでない本の境界線が移動したに過ぎない。

これよりもむしろ興味深いのは、1969年になって「読書無用論」への批判が展開されるとき、それが劉少奇の「読書做官」論の「焼き直し」とされたことである。「読書無用論」が出現した文脈とそれへの批判は、以下の引用にまとまっている。

読書が有用か無用かは、どのような本を読むかによる。(中略) この時代に、「読書無用」などというとき、まさか毛主席の本を読むことに反対するわけではあるまい。いわゆる「読書無用論」には、以下のような言い方がある。「大学を卒業した人も〔引用者注：1968年からの上山下郷運動で〕農村に住みつかねばならないのだから、読書をしたところで何の役に立つのか。」このような言い方は誤りである。知識青年を農村に生かせ、貧農下層中農から再教育を施すのは、偉大な領袖である毛主席の最大の愛護であり、最大の思いやりであり、修正主義を防止するための重要な措置である⁴⁰。

ここにあるように、「読書無用論」が実際に下放の副作用として現れたのならば、それは読書を政治的有用性のみから捉える道具的読書観と表裏一体のものとして捉えるべきだろう。しかし、この「読書無用論」は劉少奇が唱えたとされる「読書做官」論に結び付けられた。

「読書無用論」が成り立たないにもかかわらず、なぜ一部のの人に影響があるのだろうか？その原因は、劉少奇の「読書做官論」の弊害がまだ徹底的に肅清されていないことにある。この二つは実は同じものだ。「読書做官論」の毒に当たった一部の人が、「読書做官」の道がふさがれたのを見て、思想的に問題を徹底的に解決することなく、かえって「読書無用」を唱えるのである⁴¹。

すなわちここにおいて、「読書無用」の主張を政治的敵対勢力に帰することで、正当とされるイデオロギーを確立するための読書を肯定するロジックが採られたのである。1970年末以降、「真剣に読書せよ」という掛け声の下で、読書の呼びかけが一層盛んにおこなわれるようになったが、これはまさにイデオロギーの動揺に対応したものであろう。「真剣に読書して、懸命にマルクス主義、レーニン主義、毛沢東氏思想を学習して、世界観の改造のために努力する」⁴²ために行われた各地の実践事例が事細かに紙面で紹介されたことにより、この時期に関連記事数がピークに達することになる。

中央集権的なコントロールが失われる中で、イデオロギー統制のためのこの施策が実際にもたらした効果は両義的なものであったのかもしれない。文革期の「青年思潮」を跡付けた印紅標は、次のように記している。

1970年に中共中央第9回二中全会が始まってから、毛沢東は党内の政治闘争の観点から何度も幹部や群衆にマルクス・レーニン主義理論の学習、哲学と歴史の学習を呼びかけた。

(中略) マルクス・レーニン主義の著作を学習する運動は、林彪事件以後に文化大革命と中国の社会政治問題を改めて考えようとする青年に精神的武器を与えた。マルクス主義の理論は多くの青年が批判的思考を働かせる理論的なよりどころとなった⁴³。

このようにマルクスの本などを手がかりに、図書館から流出した本や内部発行の本にまで範囲を広げつつ、各地で地下読書の運動が展開され、それが1980年代以降の思想に繋がっていくような青年への影響力を持ったことは前述した近年の先行研究で指摘されている通りである。

本稿の文脈を踏まえるならば、禁書を読むという「何を読むか」の公的規範からの逸脱もさることながら、たとえ同じマルクスやレーニンの本を読むにしても、「いかに読むか」という点における政治的实践と結びついた道具的読書観からの逸脱こそを、地下読書運動の画期として評価すべきだろう。

前節から引き続き、伝統社会の道徳との関連性についても考察したい。孔子などを多く引用していた劉少奇の読書観が（曲解された形で）強く批判されたことは既に見たとおりであり、さらに1973年から1974年の批林批孔運動の時期には孔子の「読書做官」論が批判的となり⁴⁴、「神童詩」も改めて執拗に否定される⁴⁵。しかし、「万般皆下品にしてただ読書のみ高し」の価値観は否定されながらも、やはり伝統的な読書の奨励から切り離されたとは言い切れない。

この点から注目したいのは、「読書百遍義自ずから見」と題した1973年の記事である⁴⁶。この見出しの出典は明記されていないが、『三国志・魏志・王肅伝』から取った成語である。ここでは、マルクスやレーニン、毛沢東の著作が、一度読んでわからなくても、繰り返し読んで理解していくべきことが論じられている。政治的なテキストが、わからないながらも繰り返し読んで自らのものとしていく古典の位置に来ているのである。

1976年9月に毛沢東は死去し、翌月には文革の主導者と目された「四人組」も失脚して、公式的には文革は終わりを告げることになる。しかし、それまでの道具的読書観がすぐに終わるわけではない。それがよくわかるのが、「真剣に読書して“四害”を排除せよ」と題した同年11月の記事である⁴⁷。「四人組」を批判するために『毛沢東選集』などを集団で読む模範的な事例を報告するものだ。読むべき本とそうでない本の境界がまたもずらされつつ、同じ読書規範が再生産されていた。

6. おわりに

本稿では、政治文化の連続性に着目しつつ、『人民日報』の言説をもとに毛沢東時代の読書規範を考察してきた。その結果は以下の三点にまとめられる。

第一に、1930年代には、読書それ自体に内在的な価値を認めて自由な読書を奨励する内在的読書観と、読書を政治的目的のための手段として位置づける道具的読書観の論争があったが、中華人民共和国では後者が公式化された。読書は常に奨励されつつも、読むべき本とそうでない本を分ける境界は政治的事情からしばしば動かされた。

第二に、上記のような政治的実用性のみから読書を捉え、常に実践と結びつける発想は、特に文革期などに読書を否定する考え方を表裏一体のものとして引き出すことになった。しかし、これらを「読書無用論」として批判するときには、その主張は政治的敵対勢力に帰せられ、正当とされるイデオロギーの教化の手段として、むしろ読書は積極的に提唱された。

第三に、古典を通じた伝統社会の道徳はイデオロギー的に否定され、自主的に読書すべきことが主張されたが、読書を促す規範としてはしばしば援用された。政治的テキストと古典の読書は対立しつつも、繰り返し読んで体得すべきものとして相似形にある⁴⁸。

さて、ここまで、文革期の読書の規範をそれ以前の過去との連続性から捉えてきたが、同様に、それは内在的読書観が息を吹き返した改革開放期になってもすぐさま消えたわけではない。道具的読書観の残滓としての象徴的な事例が、振興中華読書活動である。1983年から全国的に

展開されたこの読書活動は、改革開放政策のバックラッシュとしての精神汚染反対運動に連動したものである⁴⁹。資本主義国からの思想の流入を「精神汚染」として除去するとき、同時に良いとされる本を積極的に読むことが勧められた。「読書と精神汚染」と題した『人民日報』の記事は次のように論じている。

「幸いにも前からあまり読書をしていなかったから、精神汚染を受けることはほとんどなかったよ。」最近ある青年が少し嬉しそうにこう話すのを聞いた。(中略) 実のところ、書籍を遠ざけても、精神汚染を遠ざけられないばかりか、その逆である。読書により汚染を受けるかどうかの鍵は、いかに読むか、識別・分析・批判の能力があるかどうかによるものであり、これらの能力は真剣に読書する中で絶えず高められていくものである。漢の劉向は「書は猶薬のごときなり、之を善く読まば以て愚を医やすべし」と言っている。(中略) 林彪、「四人組」はかつて「読書無用」「知識が多ければ多いほど反動的である」と鼓吹したが、これは愚民政策と蒙昧主義を推し進めるためであった。今日、我々が精神汚染の防止と一掃を提起するのは、高度な社会主義精神文明を建設するためであり、決して愚昧な状態に戻ってはならないし、世間と隔絶してもならない⁵⁰。

ここまでの趣旨を踏まえれば、ここで使われているレトリックには容易に気づくことができる。すなわち、「読書無用」の主張は政治的な敵としての林彪と「四人組」に帰した上で、政治的に望ましい本を選んで熱心に(古典のごとく)読むべきことが主張されるのである。1983年10月の時点で1000万人の参加者がいたとのことで、当時の新聞にはその熱心な活動の様子が多く紹介されている。それらが全て実態を正確に反映したものであるとは限らないが、文革後の「読書熱」を大いに利用する形での政治宣伝になったことは確かなようである。

この時期に出された「出版工作の強化に関する決定」(1983年6月6日)は、歴史上唯一の中共中央と国务院の連名で出された出版関連の決定であり、今日に至るまでの中国の出版政策を規定するものである。その内容は「社会主義精神文明」を強調する政治的なものだったが、出版の体制を強化した点において1980年代の自由主義的な「文化熱」のインフラを整備するものでもあった。創刊号の「読書に禁区なし」を皮切りに内在的読書観の旗振り役となった『読書』は、1984年1月号の巻頭で振興中華読書活動についての許力以・中央宣伝部出版局局長のインタビューを掲載し、しかし同年後半以降は再び西洋の書籍を積極的に紹介し始めるようになる。この間には明らかな誌面の変化があるとはいえ、その変化は連続的なものである。実際には道具的読書観の延長にあった文革期の状況が、読書の暗黒期として総括されたうえで、その反動としての1980年代に、内在的読書観と道具的読書観が「読書の奨励」という共通項をもって共存することになったのである。

- ¹ 李洪林「読書無禁区」『読書』1979年第1期、2頁。翻訳は引用者（以下同様）。『読書』の時代の意義について、比護遥『『読書』のメディア史：文化大革命から天安門事件への読書人的公共性』『京都メディア史研究年報』第5号、2018年、13-42頁。
- ² 復旦大学国際政治系調査組「社会各職業群読書観調査」『書林』1988年第9期、16頁。同様の事例として、例えば、潘登楡「急功近利導致“読書無用論”」『人民日報』1989年4月5日、5頁。
- ³ <https://www.amazon.com/中国阅读通史-民国卷-精-许欢/dp/7533686403>（2020年8月10日閲覧）
- ⁴ 例えば、Mittler, Barbara. ““Enjoying the Four Olds!” Oral Histories from a “Cultural Desert”.” *The Journal of Transcultural Studies*, vol. 4, no.1, 2013, pp. 177-215. 孫沛東「文革時期京滬知青階層化的個人閱讀」『二十一世紀』第156期、2016年、78-98頁。徐友漁『形形色色的造反：紅衛兵精神素質的形成及演變』中文大学出版社、1999年、211-221頁。印紅標『失踪者の足跡：文化大革命期間的青年思潮』香港中文大学、2009年、218-256頁。錢理群、阿部幹雄ほか訳『毛沢東と中国：ある知識人による中華人民共和国史』青土社、2012年、第10・11章。
- ⁵ 中津俊樹「紅衛兵世代における読書動向について：文化大革命以前を中心に」『中国21』第39号、2014年、147-165頁。
- ⁶ 当然のことながら、検閲等による出版への直接的統制もある。これについては例えばアラン・P・L・リュウ、慶應義塾大学新聞研究所訳『中国の政治とコミュニケーション』慶応通信、1976年、第8章などを参照。しかし本稿の主眼はむしろこうした「鞭」の側面よりも読書奨励という「飴」の側面にある。
- ⁷ ロジェ・シャルチエ、長谷川輝夫訳『書物の秩序』文化科学高等研究院、1993年、25頁。
- ⁸ Link, Perry. *The Uses of Literature: Life in the Socialist Chinese Literary System*. Princeton: Princeton University Press, 2000.
- ⁹ Mittler, Barbara. *A Continuous Revolution: Making Sense of Cultural Revolution Culture*. Cambridge: Harvard University Asia Center, 2012.
- ¹⁰ Hung, Chang-Tai. *Mao's New World: Political Culture in the Early People's Republic*. Ithaca and London: Cornell University Press, 2011, p. 5. 中華人民共和国の政治文化については日本語の研究は少ないが、民国期以前については深町英夫『身体を養う政治：中国国民党の新生活運動』岩波書店、2013年などがある。
- ¹¹ 中国の伝統社会における読書について、例えば以下を参照。McDermott, Joseph P. *A Social History of the Chinese Book: Books and Literati Culture in Late Imperial China*. Hong Kong: Hong Kong University Press, 2006.
- ¹² ただし、人民共和国成立後も中国古典作品の出版が行われていたことにも留意したい。例えば以下を参照。Culp, Robert. *The Power of Print in Modern China: Intellectuals and Industrial Publishing from the End of Empire to Maoist State Socialism*. New York: Columbia University Press, 2019, Chapter 7.
- ¹³ 例えば、胡適「為什麼讀書」『讀書月刊』第1巻第2期、1930年12月、1-13頁に対する少軒「読書論」『讀書月刊』第3巻第1・2期、1932年6月、283-311頁。詳細は以下を参照。比護

遥「消費する読者への政治的期待：1930年代中国の読書雑誌を手掛かりに」『マス・コミュニケーション研究』第98号、2021年、69-86頁。

¹⁴ ここでの議論は、佐藤卓己『ファシストの公共性：総力戦体制のメディア学』岩波書店、2018年を多く参考にしている。

¹⁵ Van de Ven, Hans J. "The Emergence of the Text-Centered Party." Tony Saich and Hans J. van de Ven eds., *New Perspectives on the Chinese Communist Revolution*. Armonk: M. E. Sharpe, 1995, pp. 5-32.

¹⁶ 1930年代以降の国共両党の政治的到達点を宣伝国家と結び付ける議論として、例えば Cheek, Timothy, *The Intellectual in Modern Chinese History*. Cambridge: Cambridge University Press, 2015, Chapter 3.

¹⁷ Kenez, Peter, *The Birth of the Propaganda State: Soviet Methods of Mass Mobilization 1917-1929*. Cambridge: Cambridge University Press, 1985, p. 145.

¹⁸ 顧家熙「我們需要『読書』」『人民日報』1979年6月16日、6頁。

¹⁹ 比護、前掲「消費する読者への政治的期待」。

²⁰ 「文革期間 科学者為何成“反動學術權威”」『鳳凰網』2013年12月14日、http://phtv.ifeng.com/program/tfzg/detail_2013_12/14/32128346_0.shtml (2019年11月19日閲覧)

²¹ 牛稼辛「読書と工作」『人民日報』1949年8月8日、7頁、同「読書と工作」『人民日報』1949年8月9日、7頁。

²² 1930年代の道具的読書観における特徴的なレトリックは、読むべき「生きた本（活書）」とそうでない「死んだ本（死書）」の区別であったが（例えば、桐若「『読死書』『死読書』『読書死』通嗎？」『読書生活』第2巻第4期、1935年6月、148-151頁）、同じレトリックは人民共和国成立後も繰り返される。例えば、馬鉄丁「読書と書呆子習氣」『人民日報』1959年3月11日、7頁。

²³ 「保定人民教育館十個月来 吸收五万人閱讀書報 創巡回書庫供給工人讀物」『人民日報』1949年12月10日、3頁。

²⁴ 「中共中央西北局指示加強幹部理論學習 各級領導同志以身作則，提唱認真讀書，配備一定幹部負責計畫組織學習」『人民日報』1950年1月26日、3頁。

²⁵ 「做領導工作的人更应当讀書」『人民日報』1959年7月15日、7頁。

²⁶ 聞石「認真讀書 虛心學習」『人民日報』1959年3月7日、7頁。

²⁷ 魯歌「雜談讀書」『人民日報』1959年6月12日、8頁。

²⁸ 中津、前掲「紅衛兵世代における読書動向について」。

²⁹ 読書に関連して反右派闘争以前の反省点を振り返る記事として、成于思「読書と“白專”」『人民日報』1959年6月17日、7頁。

³⁰ 沙英「読書、思考と総結経験」『人民日報』1961年11月25日、5頁。

³¹ 劉少奇、「共産党員の修養について」翻訳委員会訳『共産党員の修養について』新日本出版社、1964年。

³² 沙英「読書、思考と総結経験」『人民日報』1961年11月25日、5頁。

³³ 同様の引用として、例えば聞石「認真讀書 虛心學習」『人民日報』1959年3月7日、7頁。

³⁴ 江少莉「時代視野下の書評雑誌：20世紀50年代的『読書月報』及『読書』」『中国出版史研究』2016年第4期、89頁。

³⁵ なお、節の区切りとして便宜的に1966年から1976年という時期を設定したが、「十年の動乱」と総称する中国国内における支配的な言説をそのまま受け入れるわけではない。紅衛兵による破壊行為が目立って行われたのはごく初期のみであり、時期によってフェーズが大きく異なるとするのが近年の研究の知見であり、本稿もその立場をとる。

³⁶ 賀蘭玉「読毛主席の書、走革命道路我們要讀書，但我們要讀的是毛主席的書；我們要走一条路，但我們要走的是無產階級革命的道路」『人民日報』1966年5月31日、3頁。

³⁷ Mittler. “Enjoying the Four Olds!”

³⁸ 張才欽・馬長林「狠批“読書做官”論」『人民日報』1968年11月8日、4頁。このほか、例えば張書琴「用實際行動粉碎“読書做官”論」『人民日報』1968年11月8日、4頁。

³⁹ 例えば、冀慎田「徹底肅清大叛徒劉少奇“読書做官”的流毒」『人民日報』1968年12月24日、4頁。

⁴⁰ 王為民・李益群「“読書無用”嗎？：駁“読書做官論”的一種翻版」『人民日報』1969年4月21日、2頁。

⁴¹ 同上。

⁴² 「認真讀書，努力改造世界觀」『人民日報』1971年2月6日、1頁。

⁴³ 印、前掲『失踪者の足跡』219頁。

⁴⁴ 例えば、馮春祥「批判孔子的読書做官の謬論」『人民日報』1973年12月10日、3頁。

⁴⁵ 例えば、胡義君・劉麗華「為人民服務最光榮：批判“万般皆下品，唯有讀書高”」『人民日報』1974年11月3日、2頁。

⁴⁶ 郭鎖「“読書百遍 其義自見”」『人民日報』1973年7月8日、4頁。

⁴⁷ 「認真讀書 橫掃“四害”」『人民日報』1976年11月2日、1頁。

⁴⁸ 読書史の分野では、精読・音読を特徴とする集中的読書から、多読・黙読を特徴とする拡散的読書へと転ずる「読書革命」に関心が寄せられてきたが（例えば、ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ、田村毅ほか訳『読むことの歴史：ヨーロッパ読書史』大修館書店、2000年）、ここではむしろ逆方向の流れが見られることに注意したい。

⁴⁹ 経緯については以下を参照。Higo, Haruka. “The Politics of What to Read: Cultural Conflict in the Reform-Era of China.” 『Educational Changes in a Global Age：京都大学大学院教育学研究科 北京師範大学教育学部 学術交流活動2018報告書』京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター、2019年、138-152頁。

⁵⁰ 曹瑞天「読書与精神汚染」『人民日報』1983年12月13日、3頁。

・本研究は、JSPS 科研費 20J20573 の助成を受けたものである。

（日本学術振興会特別研究員 教育文化学コース 博士後期課程1回生）
（受稿 2020年8月18日、改稿 2020年11月4日、受理 2020年12月7日）

毛沢東時代の読書規範

—政治文化の連続性に着目して—

比護 遥

『人民日報』の言説分析をもとにして、政治文化の連続性という観点から、毛沢東時代(1949–1976)の中国における読書規範を検討する。文化大革命期は一般的に読書が制約された時期として捉えられがちであるが、実際には読書は積極的に奨励されており、「いかに読むか」という規範の内実こそを見る必要がある。分析の結果、政治的有用性に適う本のみを実践と結び付ける形で読むことを求める 1930 年代の道具的読書観が継承されていること、その副作用としてあるはずの「読書無用」の主張は政治的敵対勢力に帰せられたこと、イデオロギーとしては否定されていた伝統社会の道徳が読書奨励の規範として援用されたことが明らかになった。このことは文革の前後を問わず一貫しており、しかも改革開放後になっても文革を読書の暗黒期として総括することで、道具的読書観に基づいて読書を促す宣伝活動が行われ続けた。

Code of reading practice in the Maoist era: focusing on the continuity of political culture

HIGO Haruka

This paper discusses the code of reading practice in Maoist China (1949 – 1976) from the perspective of the continuity of political culture, based on discourse analysis of *People's Daily*. It is often regarded that reading was severely restricted during the Cultural Revolution, but people were actually encouraged to read at this time. Therefore, the question to be addressed is the official code of *how* to read. The analysis yielded the following three findings. First, the regime succeeded in the instrumental view of reading in the 1930s, which asked readers only to read politically useful books. Second, the claim that “reading has no use,” which was originally a secondary effect of the above-mentioned idea, was assigned to political enemies. Third, although traditional morals were denied ideologically, they were utilized to encourage reading practice. This code was consistent before, during, and even after the Cultural Revolution. By simply denigrating the preceding period as the dark age of reading, a propaganda campaign to encourage reading based on the instrumental view was implemented in the 1980s.

キーワード：読書、中華人民共和国、政治文化、文化大革命

Keywords: Reading, People's Republic of China, Political culture, Cultural Revolution